



Title	CALLシステム授業の現状と問題点：新しい外国語学習のあり方を求めて
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2002, 3, p. 42-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73110
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

CALL システム授業の現状と問題点

- 新しい外国語学習のあり方を求めて

井元 秀剛（言語文化部 フランス語教育講座）

(imoto@lang.osaka-u.ac.jp)

1 はじめに

CALL システムが外国語教育の新しい可能性を開いてくれることには誰も異存がないと思われる。単に音声を録音しただけでは伝えられないコミュニケーションの現場の雰囲気を映像と共に流すことが出来るし、その映像に対しこちらから働きかけて、発音の矯正ができる。インターネットに即座にアクセスでき、文字情報が与えられれば即座に辞書が引け、練習問題は瞬時に採点してくれる。これまで使用していた黒板の代わりにパソコンのディスプレーで情報を送る事ができ、学生は書き誤りをすることなく、それを自分のフロッピーに収める事が出来るし、教師は辞書の画面を学生に見せながら説明することもできる。

と、これだけ書けばいいことづくめで、当たらし物好きの教師なら、その可能性を試してみたくなる。私自身、その期待から一昨年度と、今年度試験的に二つの CALL 授業を行って、その成果を実体験してみた。しかし現状はなかなか思ったようにはいかず、折角の施設をそのコストに見合った成果をあげるほど活用しきれてはいない。そこで、以下の論考では現状の問題点を指摘し、それらを踏まえて今後どのような形で効果的に利用できるのかその可能性を考えていきたい。

2 現状

CALL の利用方法としては、大きく分けて(1)従来の教材を用いながら、CALL システムを活用するというやり方と、(2)CALL システムに適応したマルチメディア教材を使用するという二つの方法が考えられる。私は一昨年度は一通り文法の学習を終えた 2 回生の中級の授業に(2)の方法を、そして今年度は全くフランス語を知らない 1 回生の文法の授業を(1)の方法を使って行ってみた。今年度は同じ内容の授業を通常の教室でも行っているので、成果を比較しやすい。使用は、一通り通常の仕方で文法を説明した後、本講座の岩根久教授が開発したインターネット上で自習できる文法練習問題を使って知識の定着をはかる、というやり方であった。TA2 名の協力が得られるので、小テストや教科書の練習問題などは TA が学生から回収して、授業中にコメントをつけて返却するという体制をとった。こうして、通常のクラスと比べると、TA2 名、各人にわたる最新型のコンピュータなど、そこに投下したコストの差は計り知れない。内容面でも音声施設を使ってネイティブの発音がそのまま間髪をおかず教室に流れるし、練習問題の答え合わせは瞬時にでき、すぐに反復練習できる。さらに小テストや宿題の TA によるチェックとコメントなど、通常の学生がうけるよりはるかに多くのサービスと教授内容であった。私や TA はこのような授業がうけられる学生が非常に羨ましいとよく話したものである。

ところが、である。これほど至れりつくせりなのに、学生の反応は今ひとつで、成果もそれほど上がっていない。まず、動詞の活用を唱和させる時、声の大きさが圧倒的に通常クラスの方が大きい。居眠りをしている学生的数も CALL クラスの方が多い。逆に質問に来たり、授業以外の話題で授業前後に言葉を交わす学生は通常クラスの方が多い。要するに学生たちの授業参加の度合いが通常のクラスの方がはるかに高いのである。実際、小テスト 7 回分の平均点では、通常のクラスの学生のそれが 70 点満点中 50.47 点であるのに対し、CALL クラスのそれは 46.07 点にすぎない。この小テストの問題は上述したインターネットで使用できる文法練習問題を紙に印刷したものだから、CALL の学生はわざわざコンピューターを使って練習するチャンスと時間が与えられているにもかかわらず、そうでなかつたクラスの学生達より 4 点以上も成績が悪いのである。対象となる学生はどちらも

理科系のクラスで母体としての集団の能力にそれほどの差があるとは思われない。様々なファクターが関与するので単純な比較から早急な結論を導くわけにはいかないが、通常クラスの方が学習効果が高いというのが私の実感である。別の言い方をすれば、私はまだ CALL 教室を効果的に使いこなせていないのである。

3 問題点

それでは CALL システムの何が教育効果や学習効果を妨げているのであろうか。まず、与える側の知識不足からくる物理的な時間のロスがある。例えば、CALL 教室の機能は多岐に渡るが、結局は情報を送る、聞く、見るという伝達機能に集約される。これが新しい機械にたよるので、なかなかうまくいかないことが多く、授業は中断し、援軍を求めたりしているうちに、学生が退屈する、という図式である。ただ、これはこちらが経験と知識を積むことで容易に解決できる問題であり、慣れれば従来の方法より効率的に情報を送れるであろう。またそうでなくては CALL の意味がない。

それより、もっと本質的な問題はシステムの構造上、それを運用する教師と学生との心理的な距離が大きくなってしまうことがあると思う。私が使用した教室は A315 で、学生同士が対面し、黒板の前の教師に対しては横向きになる。従って教室で教師と学生が受け答えをする場合でも学生と対面している場合に比べて声が小さくなるのは否めない。さらに、学生はコンピュータのディスプレーと、授業をする教師という二つの対照に注意を向けなくてはならず、注意が分散する。パソコンは基本的にパーソナルなものであり、一人で擬似的な世界の中に入っていくようになっている。特にマルチメディア教材を使った場合など、ほとんど基本的に自習であり、教室というもう一つの世界から隔離してしまう。教師も端末やマイクを使ってその世界に入り込む事はできるが、ヘッドフォーンを通して聞こえてくる声など、バーチャルな世界のそれと変わらず、味気ない。要するに学生の側からすると自宅でパソコンを使ってインターネットにアクセスしたり、既存のソフトを使って自習しているのとあまり変わらず、わざわざ教室で教師やクラスメートと時間を共有する必然性が全くないのである。これに対し従来型の授業は基本的に一期一会の世界である。教師の肉声はその場で、そこにいなくては聞けないし、隣にいる学生と同じ話を聞き、同じ時間を共有した、という実感がある。気が散るような端末がないからノートも取りやすい。結局この学生の参加意識の差が、学習効果の差につながったのではないかと私は思っている。

これから CALL 授業の運営にあたっては、この CALL システムが持っている人間的な距離の希薄化、という欠点を十分に認識しておく必要があると思う。教師と学生も、また学生同士も、CALL 教室の中では結びつきが弱くなる。

4 これからの CALL 授業の可能性

では、どうしたらいいのか。私の失敗はつまるところ従来型の授業を手段の部分だけ CALL を使って行おうとしたところにあると思う。CALL 授業にはその特性を活かした、CALL でしかできない授業を構築する必要がある。例えば、一つの時事的な問題を取り上げて、インターネットから多角的な情報を取り出し、相対的なものの見方を養う授業とか、ニュースの内容を録音しそれを書き取る授業とか、情報の検索が早い分、多くの情報量を与えるような工夫をすれば、その効果が期待できるような気がする。

しかし、外国語、特に私が担当する初習の授業では、そのような工夫も限られている。そこで、従来型の一斉授業という枠組み自体を見直して、自習教材としての役割に転換することをむしろ提案したい。市販されているマルチメディア教材はあらゆる機能と内容を備えており、ほとんど教師の介在を必要としない。今後 100 人収容できる大 CALL 教室が稼動するようになると、前述した学生との心理的距離はますます広がり、クラスとしての集団を統率することはますます難しくなる。どんなに監視しても、勝手にネットサーフィンに興じる学生も増えるだろう。パソコンはその名が示すごとくパーソナルな側面に力を発揮するものであるから、これを積極的に利用するのである。CALL 授業は通常のクラスの補助、教師や TA はあくまでアドバイザーとしてそこにいる、という新しいタイプの教育モデルを作っていく必要がある、というのが私の結論である。